

4 調査に関するQ&A

(1) 調査について

【Q1】

従来の調査と県学力・学習状況調査はどう違うのですか。

【A1】

従来の調査は、学力を正答率で表すことが多く、正答率は、調査年度の子供の学力の現状を把握することには適していますが、実施年度が異なる調査の結果を比較しにくいという課題があります。

そこで、県学力・学習状況調査では、問題の難易度を考慮に入れて学力を測定する、つまり、「どれくらい難しい問題に正答できたか」という視点を加え、小学校4年生から、中学3年生まで、子供たちの学力が伸びていく様子をより明確に示すことができるようになっています。

【Q2】

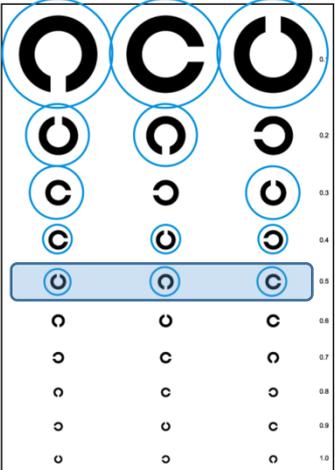
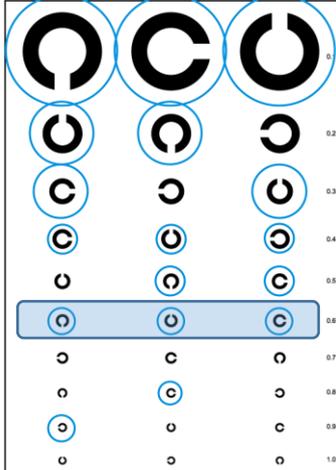
学力のレベルとは何ですか。また、どのように測定していますか。

【A2】

本調査では、学力のレベルを「難しい問題を解く力」とし、レベルが上がるほど難しい問題を解く力があると捉えています。問題には、それぞれ難易度を設定しており、問題への解答状況で学力を測定しています。

例えば、小学校3年生の学習内容で、 $12 \times 6 = 72$ という「整数のかけ算」の問題より、小学校4年生の学習内容で、 $0.5 + 21.5 \times 6 = 129.5$ の「小数のかけ算とたし算が混ざった問題」の方が難易度の高くなっています。このような難易度の問題に安定して正答すると、学力レベルも上がることになります。

健康診断での「視力検査」をイメージしてください。

Aさん				Bさん			
	0.1						
	0.2						
	0.3						
	0.4						
	0.5						
	0.6						
	0.7						
	0.8						
	0.9						
	1.0						

○ … 見えたもの

視力検査では、「どれくらいのサイズの文字や記号が安定して識別できるか」を測ります。
例えば、Aさんの場合は、視力 0.5 の記号までが安定して見えているので、0.5 と判定されます。

一方、Bさんは、0.8 や 0.9 の記号も見えているようですが、安定して見えているのは 0.6 の記号までですので、視力は 0.6 と判定されます。

この「文字や記号のサイズ」が「問題の難易度」に相当します。

本調査では、小学校 4 年生から中学校 3 年生までのすべての問題に難易度を決めて、子供たちの正答状況から「学力のレベル」を測定しています。

(2) 個人結果票の見方について

【Q3】

同じ正答率の場合、同じ学力レベルになるのですか。

【A3】

同じ学力レベルにならない場合もあります。

県学力・学習状況調査の問題は、正答率が高いか低いかではなく、難しい問題に正答できるほど、高いレベルとなります。

例えば、同じ 10 問を A と B の子供が解答した場合に、A は一番簡単な問題を 1 問間違えて、残りは全て正答し、B は一番難しい問題を 1 問間違えたとします。この場合、正答率で考えると、A と B の学力はいずれも 90% で同じということになりますが、本調査においては、より難しい問題に正答できている A の学力レベルの方が高くなります。

【Q4】

学力レベル 7 で考えた場合、小学校 4 年生の学力レベル 7 の児童と、中学 1 年生の学力レベル 7 の生徒の学力は、同じと考えてよいのでしょうか。

【A4】

県学力・学習状況調査の「学力のレベル」については、学力レベルが上がるほど難しい問題を解く力があると考えています。小学校 4 年生のレベル 7 と中学校 1 年生のレベル 7 では、正答できる問題の難易度は同じです。

ただし、小学校 4 年生の学力レベル 7 の児童が中 1 のレベル 7 の問題を解けるかということ、解けない可能性が高いです。これは、学習指導要領により学習内容が定められているため、中学校 1 年生のレベル 7 の問題を小 4 の児童はまだ習っていないためです。

【Q5】

小学4年生の学力レベル5だった児童が、小学校5年生でも去年と同じ学力レベル5の場合は、学力は伸びていないのですか。

【A5】

本調査ではこの場合、新しいことを学び成長していますが、昨年度より難しい内容の問題を解く力は、まだ不足していると捉えています。

例えば、ある児童が4年生のときに、 $12 \times 6 = 72$ という「整数のかけ算」の問題を正答し、5年生の調査では、 $91 \div 7 = 13$ という「整数のわり算」の問題を正答できたとします。この児童は「わり算」のやり方を学んだことにより、 $12 \times 6 = 72$ と同じくらいの難易度の問題に正答できたということになり、新しいことを学ぶことで成長しています。

しかし、さらに難易度の高い設定の $0.5 + 21.5 \times 6 = 129.5$ という「小数のかけ算とたし算が混ざった」問題に、安定して正答することができなければ、レベルを上げるまでの学力が不足していることとなります。

【Q6】

児童生徒の学力の変化について、どんなコメントをしていますか。

【A6】

コメントは、次の①～⑦のパターンがあります。

	児童生徒の学力の変化の状況	表示されるコメント
①	・学力が伸びて、レベルが上がった場合	あなたの学力は、「レベル〇」まで伸びました。
②	・同じレベル内で、伸びがあった場合	あなたの学力は、「レベル〇」の中で伸びがありました。
③	・学力の位置が前年度と同じだった場合 ・学力の位置が前年度より下がった場合 (レベルが1つ下がった場合を含む)	あなたは、「レベル〇」の学力があります。 (〇は H28 の児童生徒の学力レベルの数字)
④	・2つ以上レベルが下がった場合 ・正答数が0問であった場合 (学力のレベルの ■ は表示されません。)	学校の先生等と、学習などについて相談をしてみましょう。
⑤	・全ての調査問題に正答した場合	あなたの学力は、レベル〇以上になりました。 (〇は当該学年での最高レベルの数字)
⑥	・本年度の調査を未実施の場合 (昨年度実施・未実施の場合とも)	本年度の調査を受けていないため、今回の学力のレベルは表示できません。
⑦	・本年度の調査は実施したが、昨年度の調査を未実施の場合	あなたは、「レベル〇」の学力があります。 (〇は平成 28 年度の児童生徒の学力レベルの数字)

【Q7】

正答数が0問だった場合は、レベルの表記はどうなりますか。また、全問正答した場合はどうなりますか。

【A7】

正答数が0問の場合は、「学力のレベル」は表示されません。どのレベルに達しているか、測定できないためです。

また、全問正答した場合は、該当学年で測定できる問題の範囲の一番高いレベルの数字で、「あなたの学力はレベル〇以上になりました。」と表記されます。

【Q8】

学年の中で、レベルの数値が1上がると、該当学年内でのレベル数値は低くても「大きな伸びが見られた」とコメントされていますが、なぜですか。

【A8】

本調査では、どの学力レベルの中でも、数値が伸びているのであれば、子供一人一人に伸びを実感させ、自信を持たせることが重要と考えています。

そのため、昨年度の自分と比較して1レベル難易度の高い問題を解けるようになったことを「大きな伸び」と捉えてコメントしています。

【Q9】

中学2年生での学力レベルが5（中学2年生の中では一番低い学力レベル）の場合、学力レベル5より下の学力レベルにはつけられない状態になっています。この場合の学力レベルは、どのような基準でつけているのですか。

【A9】

中学2年生の調査における学力の測定できる問題の範囲はレベル5からレベル11と設定しています。レベル5の問題に1問でも正答していれば、レベル5の学力がある可能性があるため、レベル5に位置付けられるようになっています。この場合、レベル5を明らかに下回るのは、正答数が0問の場合であり、その場合は、レベル自体も表示されないこととしています。

【Q12】

個人結果票を児童生徒に返却する際、どんなことを伝えればよいですか。

【A12】

本調査は、過去の自分の学力と現在の学力を比較できる設計となっています。

学力の変化の状況により、教員が保護者や一人一人の子供に適切な働きかけを行うことにより、今後の学力向上につなげていただきたいと考えています。学力が伸びた子供に対しては、1年間の頑張りを認めたり、褒めたりすることで、自信を持たせてください。また、学力が伸びていない子供に対しては、教員と教育相談などを行うことで、つまずきや悩み等を共有し、子供の取組について丁寧な見取りなどを行うことで、今後の学力向上につなげてください。

子供の解答状況については、「教科の領域別正答率」の数値やレーダーチャートを参考にしてください。具体的問題については、本調査の設計上非公表となっていますが、県ホームページ上に「問題概要」や「復習シート」（類似問題）を掲載しているので、それらも活用してください。

（4）結果帳票について**【Q13】**

帳票「教科に関する調査」にある学校の学力レベルは、どのように決められているのですか。

【A13】

在籍する子供たちの学力の平均値で決定しています。その平均値を学力のレベル（12のレベルを3分割に細分化した数値、1-C～12-A）に当てはめています。市町村の学力レベルも同様に決定しています。

【Q14】

帳票の「26_学力の伸びの状況」の見方についてです。線の傾きは何を表していますか。

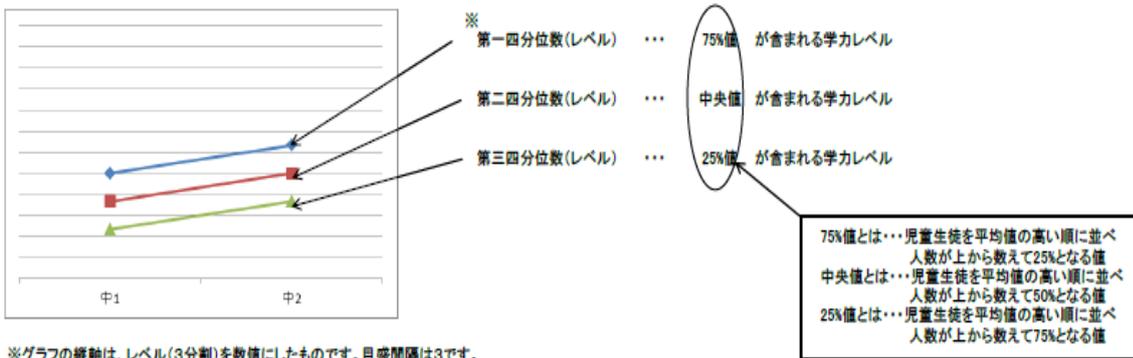
【A14】

この帳票では、同じ学齢の集団の中で、特定の位置にいる児童生徒（75%値に位置する児童生徒、中央値に位置する児童生徒、25%値に位置する児童生徒）の前年度と今年度の学力を示しています。

前年度のそれぞれの位置を、今年度と比べることによって、この集団の学力分布の変化が分かります。

「26_学力の伸びの状況」の見方

この帳票では、H27中1とH28中2 のような同集団を比較しています。当該学年の学力の変化を表すものです。



線の傾きのパターンによって、それぞれの層に分布する児童生徒の状況が分かるので、前年度の指導効果を考える参考にしてください。

(例)

どの分位数も右上がり	傾きにばらつき①	傾きにばらつき②
<p>上位層、中位層、下位層、どの層の児童生徒も学力を伸ばしている。</p>	<p>上位層に伸びは見られないが、中位層、下位層の児童生徒の学力は伸びている。</p>	<p>上位層は伸びているが、中位層にほとんど変化はなく、下位層の学力は下がっている。</p>